

# 幼児教育の質の向上をめざして

幼児教育センター指導主事研究会議

小林 朝香 根津 牧子 桜井 伸子

## I 主題設定の理由

近年、幼児教育の重要性が叫ばれるようになってきた。平成 17 年 1 月の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」では、社会環境の急速かつ大きな変化に伴う幼児教育の多様な展開に対応するため、幼稚園教員の資質及び専門性の向上が、重点施策として挙げられた。また、川崎市では、平成 19 年に策定された「川崎市における幼児教育の方向性及び市立幼稚園（研究実践園）のあり方に関する基本方針」において、幼児教育センターは幼児教育の充実や振興を図るため、より一層の組織体制の強化が必要であるとした。そして、その役割として、幼稚園教諭・保育士の“資質・専門性の向上”、幼稚園・保育所における“教育・保育の支援”“子どもの育ちをつなげるコーディネーター”“幼児教育に関する情報発信”“子育て支援”等が示された。そこで、幼児教育の質の向上に向けて、当センターの在り方を探り、より一層の幼児教育の充実や振興を図ることが急務であると考え本主題を設定した。

また、本研究のねらいについては、次のように定めた。

<研究のねらい> 幼児教育の質の向上に向け、幼児教育センターにおける新たな取組を探る

## II 研究の内容

### 1 研究の方法

「幼児教育の質の向上」について、秋田喜代美は「何をもって『質』というのか、単純に定義することは難しい。OECD（経済協力開発機構）の報告書によると、『保育制度』『カリキュラム』『保育者の資質』の大きな三つの柱を立てて、各国が質の向上を目指している。」<sup>1)</sup>と述べている。

また、昨年度実施した「川崎市乳幼児の生活実態調査」<sup>2)</sup>からも保護者が抱く子育ての悩みの内容は多岐に渡っており、保護者に対応する保育者の資質向上が求められるところである。

本研究会議では、幼児教育の質の向上については、「保育者の資質」が大切であると考えるとともに、就学以降の教育機関との連携による幼児教育の振興・啓発も同様であると考えた。そこで、研究を進めるに当たり、幼稚園・保育所での「保育者の資質向上」を視点1、「幼児教育の振興・啓発」を視点2ととらえ、従前の事業の実践から確かめられてきた「ニーズに対応した事業」を進めながら「視点から考えられる新たな取組の創意及び試行」を展開することとした。また同時に、教育機関へのアンケートを実施し、保育現場で求められる「保育者の資質及び専門性の向上」についての意見や、「教育機関との連携」を進める上での就学前後の相互理解等に向けた取組への意見を伺い、幼児教育に関する課題やニーズを踏まえながら、幼児教育センターとしての新たな取組を探ることとした。

研究方法の流れを図に表すと次のようになる。

<sup>1)</sup>「BERD NO16」 pp13-14 ベネッセ教育開発センター 2009年

<sup>2)</sup>「川崎市乳幼児の生活実態調査報告書」 pp15-16 川崎市総合教育センター幼児教育センター2009年

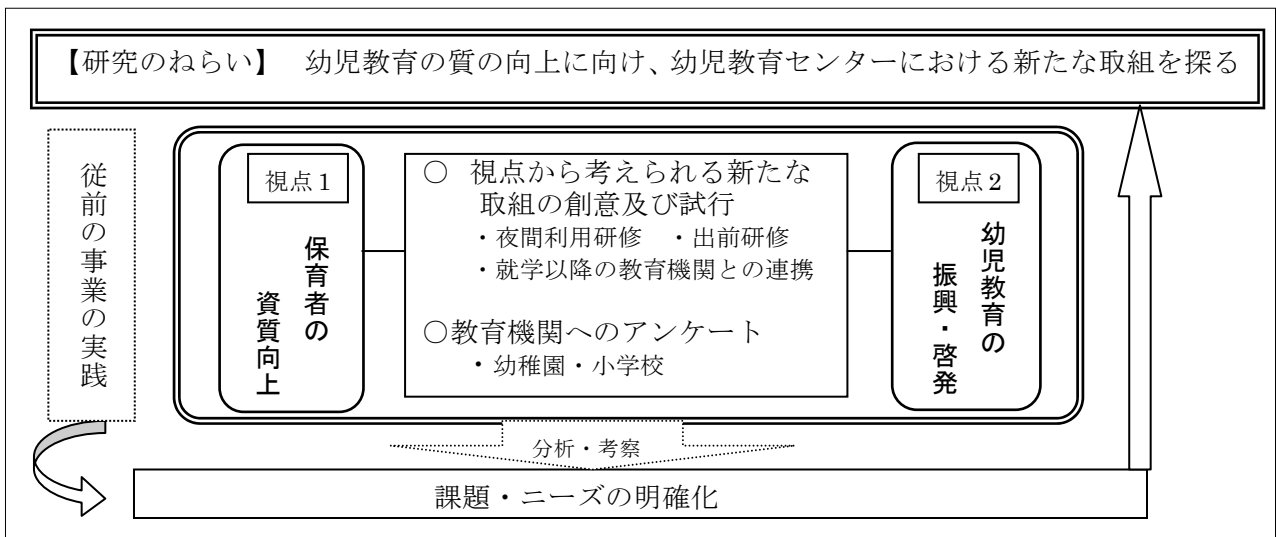


図1 研究方法の流れ

## 2 新たな取組の創意及び試行

### (1) 取組の実態 視点1から

#### ①夜間利用研修 (実施会場：幼児教育センター)

従前の事業のアンケートから数は少ないものの、土曜日の研修や夜間研修の希望が毎年挙がっている。私的な時間でも研修をしたいという幼稚園等の教職員を対象に次のような新たな取組を行った。

	A 幼児特別支援教育研修	B 保育ビデオカンファレンス研修
実施年月	平成21年5月・6月	平成21年9月・10月
講師	特別支援教育コーディネーター(幼稚園教諭)	鎌倉女子大学 岸井 慶子 教授
内容	特別な支援を必要とする幼児への対応や、グループ毎にかかわり方等について話し合う。	保育場面のビデオを視聴し、幼児の内面や教師のかかわりなどについて話し合う。
参加人数	延べ 27名	延べ 15名

#### <考察>

「A幼児特別支援教育研修」の出席者は経験年数の少ない保育者(0～4年)の参加が多く、研修後のアンケートでは、特別な支援を必要とする幼児に対して、「どのように対応したらよいか」といった、幼児への対応の困難さが伺える内容が多かった。また、日々の保育に追われ悩みを一人で抱えているといった実態も見られ、「同じ悩みをもつ先生同士が話し合え、自分だけではないんだと安心した」といった感想が聞かれた。これらの内容をKJ法でまとめると、指導内容に関するもののほか、『不安解消』『共有』『安心』等、保育者自身の内面に関する内容が多く見られた。「保育者の資質向上」のためには、知識や技術などの専門性を高めることのみならず、幼児教育センターが保育者の精神的な支えの場として悩みを聞く場づくりや、保育者同士をつなぐ場づくりが必要であるということが見えてきた。

見えてきたこと： 悩みを聞く場・保育者同士をつなぐ場づくり

そこで、「A幼児特別支援教育研修」で見えてきたことや、話し合いから得られた保育者の抱える課題(保護者対応等)解決に向けて、この研修の継続を計画し、10・11月に、より専門的(ケースワーカー、保健師)な立場からの助言を求める場を設定した。(「A」幼児特別支援教育研修)

この研修の中で、各専門機関の機能や具体的な事例に基づいた話し合いをしたことにより、それぞ

れの悩みを解決する手立てや、他機関と連携する方法を理解し、連携への取組へつないでいくことができた。このことから、他の関係機関と保育を実践していく場をつないでいく必要性が見えてきた。

見えてきたこと： 他の関係機関とつなぐ場づくり

「B保育ビデオカンファレンス研修」の出席者の経験年数は、5年以上が多いが、自分以外の人の保育を見たり意見交換をしたりする機会がほとんどないといった実態が伺え、保育に関して、自分の園以外の人と保育ビデオを見たり話したりすることのよさが感想として挙げられていた。アンケートをKJ法でまとめると『話し合える場』『カンファレンスの方法』『振り返り』等にまとめられた。

幼児教育センターの役割として、自分以外の人の保育を見たり、他の人の保育の見方や考え方を聞いたりして自分の保育を振り返る場を作っていくという必要性が見えてきた。

見えてきたこと： 話し合いの場づくりから、保育を振り返る場づくりへ

これまでの取組で見えてきたことから、研修を受ける側の状況に細やかに対応していくという新たな課題が出され、今後の取組の示唆を得ることができた。

## ②出前研修

①の結果を踏まえて、従前から実施していた「要請訪問」や「個別の指導計画作成の推進」を見直し、各園へ出向く研修としてさらに内容を広げた取組を次のように行った。

	C 園内研修	D 個別の指導計画作成研修
実施年月	平成 21 年 12 月～	平成 21 年 11 月～
講師	幼児教育センター 指導主事	幼児教育センター 指導主事
内容	・ 保育ビデオカンファレンス ・ 特別支援教育研修	・ 個別の指導計画作成に向けて ・ 園内の事例に基づいた研修
実施園数	3 園	9 園

### <考察>

「C園内研修」後のアンケートをKJ法でまとめると、『保育の振り返り』『気付き』『共通理解の方法』などにまとめられた。

「D個別の指導計画作成研修」後のアンケートをKJ法でまとめると、『記録することの意味』や『必要性の理解』等にまとめられた。

個々の園の実態やニーズに合った細やかな研修内容の企画や場をコーディネートし実施することで、保育者の意欲を喚起し、「保育者の資質向上」につながっていくと思われる。

見えてきたこと： ニーズに応じた園内研修内容のコーディネート

これまでの取組は、「保育者の資質向上」に視点を当て実践を進めてきたが、これらの研修の成果は相互に関連し合って保育に生かされ、繰り返し積み重ねていくことが、幼児教育の質の向上につながる一助になるのではないかと考える。

これら視点1の取組の過程を図で表すと、図2のようになる。

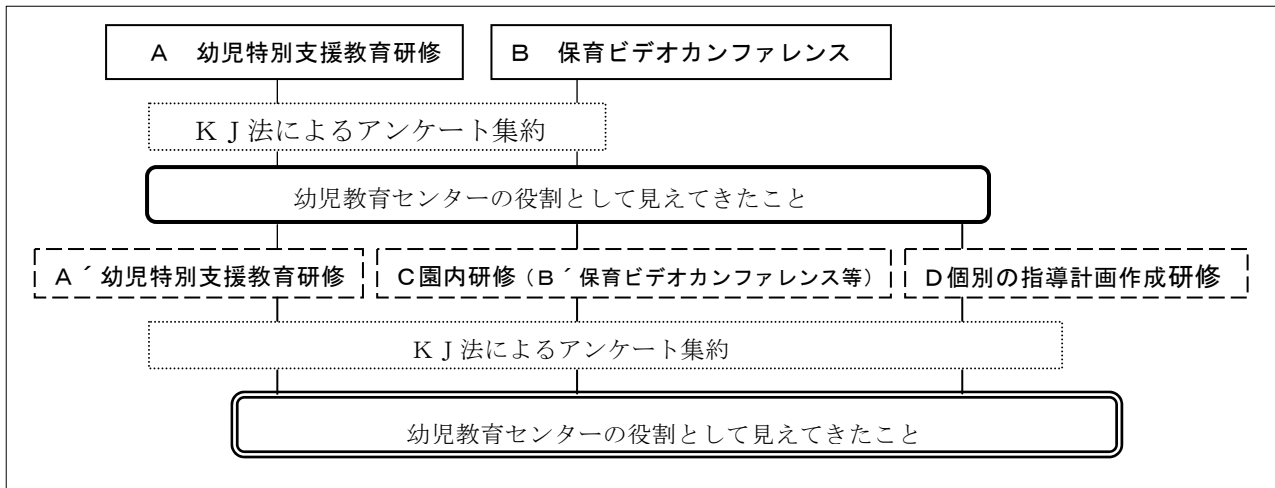


図2 視点1の取組の過程

### ③アンケートから

市内私立幼稚園長を対象に、「保育者の資質及び専門性の向上について必要と思われる内容」についてアンケートを実施した。図3から、特別支援教育の理解、保護者対応等、日々の保育の充実に重きが置かれていることがわかり、夜間利用研修と同様な内容が求められていることが伺える。また、必要と思われる内容が多岐にわたっていることから、ニーズに対応するためには、個々の園のニーズに応じた園内研修をコーディネートし実施していくことが、ここからも、幼児教育センターに求められる役割の一つとして考えられる。

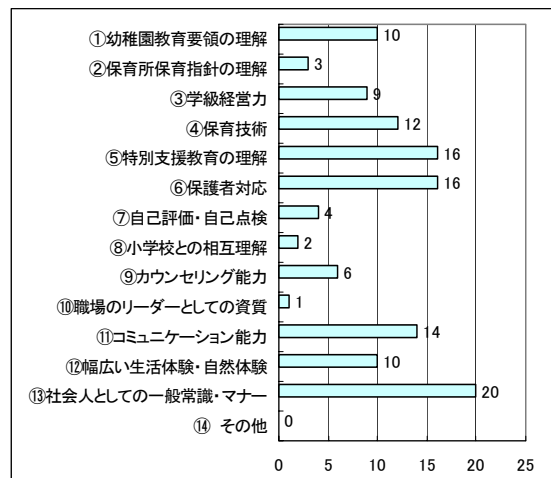


図3 保育者の資質及び専門性の向上で必要と思われる内容  
(特に必要と思われる内容を3つ選んで回答)  
(回答数85園中41園 単位:人)

## (2) 取組の実態 視点2から

### ①中学校出前研修 (生徒の幼稚園訪問に向けた事前指導)

中学校の生徒を対象とした幼児教育の出前研修として、元幼稚園教諭の幼児教育センター指導主事が担当教諭とともに家庭科の授業を行った。幼児教育センターとしての出前研修の実施目的は、「将来、親となる生徒に、幼児との触れ合い方やかわくことの楽しさを経験してほしい」という願いや、中学校教員への幼児教育の啓発等も含まれている。内容は次のとおりである。

対 象	A 中学校3学年 (4クラス)	B 中学校3学年 (4クラス)
実施年月日	平成21年9月16日	平成21年10月29日
主題名	「幼児の遊びを知ろう」	「おもちゃを作ってみよう」
ねらい	・幼児に対して関心をもち、幼稚園訪問に期待をもつ。	・幼児の遊び道具の制作を通して、幼児の遊びの意義について考える。
内 容	・実践を通して(手遊びを通して幼児の発達やかかわる上での配慮点等について) ・ビデオ視聴を通して(幼稚園生活の様子や各歳児の発達の特徴について)	・おもちゃ作りを通して(幼児の発達や遊ぶ上での環境の配慮点等について) ・実践を通して(幼稚園児を対象とした手作りのおもちゃ制作について)

## <考察>

出前研修後の生徒の感想をまとめると、幼稚園訪問への『期待』『興味・関心』『意欲の高まり』のほか、「自分のしてもらったことにこんな意味があったことを知った」「自分の幼稚園の頃のことを思い出した」といった『自分への振り返り』などが挙げられた。また、幼稚園訪問後の生徒の感想をまとめると、出前研修で事前に、幼児の発達の特徴・かかわり方・幼稚園の様子などを知り、園訪問への見通しをもてたことでの『安心感』が多く挙げられていた。

また、2校の担当教諭からは次のような感想が聞かれた。

- 家庭科教諭が行う内容とは異なり、専門性を生かした内容であった。
- 生徒にとっても、授業者が異なることは、新鮮であり効果的であった。
- 訪問先の幼稚園の先生に話をさせていただくのがよいと思うが、時間的なことを考えると依頼しづらいので、出前研修はありがたい。
- T・Tとしてかかわったことで、生徒の取組を客観的に見ることができた。
- おもちゃを作る際に悩んでいる生徒に対して、アドバイザー的なかかわり方がよかった。

元幼稚園教諭が出前研修を行ったことで、専門性を生かすことのメリットが、生徒や担当教諭の感想から伺え、幼稚園訪問の事前指導として、また幼児や幼稚園を知るといった意味でも効果があったと考える。しかし、幼稚園側・中学校側とも連携のメリットは認めているものの、年間の流れのどの部分でどのような内容で実施していくことが効果的であるかなどについて、幼児教育センターが双方の仲立ちとなりコーディネートし、共に考えていくことでより交流の効果が高まっていくのではないかと思われる。

見えてきたこと： 専門性を生かした、教科との連携  
異校種間連携のコーディネート

### ②川崎市幼稚園協会との連携研修

「川崎市幼稚園教育課程研修会」を公私立幼稚園教諭の合同研修として実施した。公私立幼稚園の教諭が共に協議を行うことで、お互いよい刺激となり、保育実践の大切な視点を得る場となった。また、川崎市幼稚園協会主催の「10年教諭研究会」に幼児教育センター指導主事2名が参加し、全6回を通して支援を行った。このような定期的な研究会に参加する機会を得ることで、幼児教育センターと各園がつながり、そこから出前研修等の機会へと発展し、連携に広がりを見ることができた。

### ③小学校教育研究会の各教科等研究会

幼稚園の生活の場面で、学びの芽がどのように育まれ、小学校の学びへとつながっていくのかについて各教科等研究会（算数・音楽・図画工作・生活科）へ参加し話す機会を得た。幼児教育センターが各研究会等へ出席し、着実に回数を重ね相互理解を図っていくことが幼児教育の啓発の一つであることを再認識した。

見えてきたこと： 幼児教育の重要性のさらなる発信

### ④アンケートから

小学校の校長等を対象に、課題やニーズを把握するため、幼・保・小連携についてのアンケートを実施した。（回答数 市内小学校長 109名、川崎市内小学校新任総括教諭 55名、平成21年10～12月実施）

図4「幼・保・小の連携が必要と思われること」を見てみるとその必要性は、新入学児童の学級編成に関する内容に集中している。紙面の都合で割愛したが、他の質問項目では「幼稚園・保育園との関係づくり」が連携を進める上での課題として挙げられている。そこで課題解決のためには、「幼・保・小連携のコーディネート」が、求められる役割の一つとして挙げられる。また、図5の「小学校教員に理解が必要と思われる内容」については「教育・保育内容」「幼児の発達や心理」といった専門性を求める内容が多く挙げられていることから、ここでも小学校に向けて幼児教育の重要性の発信を行うことが、求められる役割といえることができる。

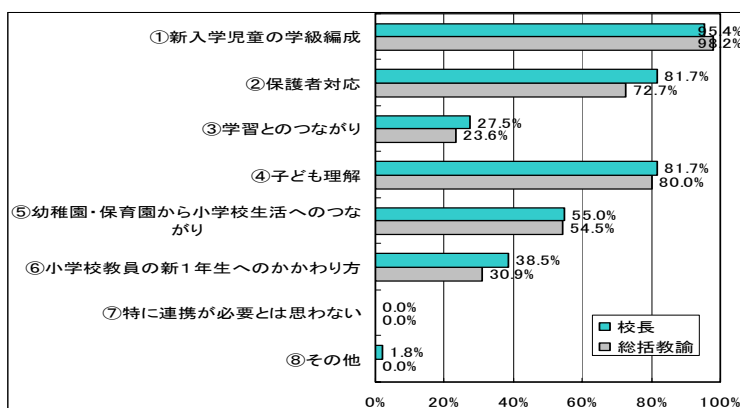


図4 幼・保・小の連携が必要と思われること（複数回答可）

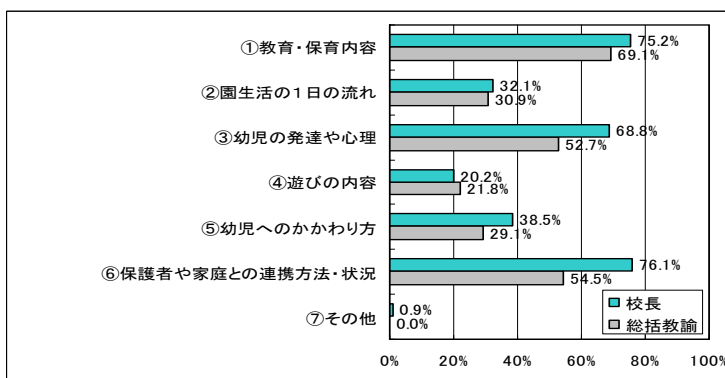


図5 小学校教員に理解が必要と思われる内容（複数回答可）

### Ⅲ 研究のまとめ

「視点1 保育者の資質向上」では、取組から見えてきたことを意識しながら、研修を実施するとともに、園内研修が充実するよう支援していくことが、保育者の資質向上につながる第一歩ではないかと考える。また、「視点2 幼児教育の振興・啓発」においては、小学校以降の教育機関へ、幼児教育の重要性を様々な形で発信してきた。特に中学校との連携では、家庭科以外にも職業講話という形で依頼を受け実施するなど、生徒への啓発も含め成果を得ることができた。今後も着実に啓発活動を展開していくことが求められる。今回、高等学校のキャリア教育においても働きかけを行ったが、就職や進学がより身近に迫り、幼児教育センターだけでは負いきれない難しさに考えを改める結果となった。しかし、保育園等の体験の事前指導という点では、中学校同様家庭科において次年度の連携に期待もてる。

視点1と視点2のそれぞれの取組に当たっては、その成果が互いに絡み合いながら広がりや深まりを得られるように進めていくことが大切であり、今後も、引き続きこれらの取組から見えてきたことを念頭におきながら幼児教育の質の向上に向け、さらに可能な取組を探っていきたい。

最後に、本研究を進めるに当たりご助言をいただきました講師の先生、また、アンケートにご協力いただいた、川崎市幼稚園協会園長会並びに川崎市小学校校長会始め教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

#### 【指導助言者】

鎌倉女子大学短期大学部教授（川崎市総合教育センター専門員）

岸井 慶子